

「いのちの願い」

藤田徹文先生の著書『いのちの願い』の中で、「阿弥陀仏の本願」について次のようなことが書かれていました。

.....

「あなたの〔いのち〕が本当に願っていることを実現してあげたい」というのが阿弥陀さまの願いです。私たちの「いのち」が本当に願っていることは何かと言えば、「自在」ということです。

「自在」は「自由」とは違います。

「自由」とは縛^{しば}られている状況から抜け出すことによって獲得^{かくとく}するものです。

例えば、家で奥さんに縛られている人は、家から出て、よそに飲みにも行ったら自由。また会社に縛られているサラリーマンは仕事が終われば自由。

つまり「自由」は現状から抜け出すことによって実現するものです。

しかし「自在」というのは縛られているものから抜け出すというのではなく、どの場にあっても私は私として、何物にも束縛^{そくばく}されずに存在するということです。

家にいる間は自由でないとか、会社にいる間は自由がないということではなく、どこにいようと、自分の「いのち」のありったけを生きるというのが「自在」です。

それが仏教で言う本当の「楽」です。その楽が極まった世界が「極楽」です。

ですから「極楽」というのは何物にも縛られないで生きられるところなのです。

それぞれの「いのち」が一杯生きてそれぞれの「いのち」が照らしあい支え合う、そんな世界が極楽なのです。

そのことを象徴的に表しているのが「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という阿弥陀経の言葉です。

青い色の花は青い光を出し、黄色は黄色、赤は赤、白は白というのが「自在」なのです。だから人と比べてどうこうということではないのです。他と比べて「勝った、負けた、上だ、下だということではない。その人でしかない「いのち」を生きていくというのが「自在」です。

.....

「自在」と「自由」の違いを大変分かり易く解説されています。

私たちの「いのち」が本当に願っていることは「自由」ではなく「自在」だと仰っています。

「自在」とはどのような立場にあっても何物にも束縛されずに、それぞれがそれぞれの持ち味を生かし（青色青光、黄色黄光）いただいた「いのち」のありったけを生きるということだと仰っています。

以前、「光明寺だより 23号」で次のような詩を紹介したことがあります。

みんなすごい
カイズカイクキもモッコクも
ツツジもシャクナゲもアジサイもすごい
スズメもカラスものらネコも
ムカデもアリンコもダンゴムシもみんなすごい
みんな「自分」を生きている

この詩にあるように、あらゆる「いのち」はどのような立場・境遇にあるうとも、愚痴をこぼさず、自分の「いのち」を精一杯生きています。
のら猫が「飼猫になりたい」とか、松が「桜になりたい」と羨ましがったりはしません。そこには、何物にも束縛されることない「自分」でしかない「いのち」を生きているのです。

ところが、私たち人間はどうでしょうか。

「何でこんな苦勞をせないかんのや」

「何でこんな病気になったんや」

「何でこんな家に生まれたんや」等々・・・

周りと比べて自らの不遇ふぐうを嘆き、不平不満なげの愚痴ぐちをこぼしては自らを縛り、身動きできないような、そんな日暮しを送っているのではないのでしょうか。

これではとてもいただいた「いのち」のありったけを生きているとは言えません。

だからみ教えに出遭わなければダメなのです。

み教えに出遭えば、我が身の姿が明らかにされます。

その我が身の姿を親鸞聖人は次のように仰っています。

『「凡夫」といふは、無明煩惱むみょうぼんのうわれらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず』

(一念多念文意)

つまり、私たち凡夫は迷いの根源である煩惱がこの身体一杯に満ちあふれ、欲むさぼを貪り、腹を立て愚痴をこぼし、ねたみやひがみ心が強く、死ぬまでその煩惱は無くならないというのです。
しかも私たちは、「自是他非じぜたひ」の心(自分は善くて他人は悪いという心)を持っていることにさえ気付かずに日々を過ごしているのです。まことに、救われ難い、お粗末で愚かな煩惱具足の凡夫なのです。

そんな私の「いのち」が、無量壽むりょうじゆ・無量光むりょうこうと呼ばれる、文字通り光と寿命のきわみない「いのち」の世界で、生かされて生きていくということが、教えを通して知らされるのです。

その「光と寿命のきわみない〔いのち〕」を阿弥陀如来と申し上げるのです。

正信偈の冒頭の意識に「光といのちきわもなき阿弥陀ほとけを仰がなん」とありますように、我がいのちを包み生かして下さっている大いなるいのちのハタラキを浄土真宗のみ教えに生きた先人たちは、阿弥陀さまといただいてきたのです。

もとより阿弥陀さまの本体は色も形もありません、そこにはあらゆるいのちを包み生かす「ハタラキ」だけがあるのです。

そのハタラキを法性法身ほっしょうほっしん(法身仏ほっしんぶつ)と申します。

その法性法身（法身仏）が、そのハタラキ（あらゆるいのちを包み生かしているというハタラキ）を凡夫の私たちに知らせるがために、姿、形を表し（これを方便法身仏と申します）、「南無阿彌陀仏」という呼び声となって、私の目覚めを促し続けているのです。

凡夫の私にとって色もない形もない法性法身は感得出来ません。
ですから姿、形を表し、南無阿彌陀仏という呼び声となって私に働きかけて下さることによって、法性法身のハタラキを知ることが出来るのです。

その呼び声（南無阿彌陀仏）は、小さな「自我」の計らいに縛られて生きている私に向かって、「そんな狭い世界から一刻も早く出てきなさい、アミダという光といのちのきわみないひろい「いのち」の世界に帰ってきなさい」と呼びかけているのです。

思えば、私たちは自分の周りに溝を掘り壁を築いて、自分にとって都合の良いものや味方と思えるものは中に入れるが、そうでないものは排除していくという、大变身勝手に自己中心の狭い狭い世界の中に身を置いています。

そんな私たちに向かって「あなたの「いのち」はそんな狭い世界に生きている「いのち」ではありません。大きな大きないのちのハタラキに包まれ生かされている「いのち」です。早くそのことに目覚めて下さい」というのが南無阿彌陀仏の呼び声です。
その阿彌陀さまの呼び声が聞こえた時、私たちの「いのち」はあらゆる束縛を脱して、自在に生きる人生が実現するのです。

「いのち」自在たれ、それが南無阿彌陀仏の呼び声なのです。

平成29年2月 「光明寺だより94号」より